

大宰府条坊跡

第185次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第 94 集

2009

筑紫野市教育委員会

大宰府条坊跡

第185次発掘調査



例 言

1. 本書は共同住宅建築に伴う発掘調査の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査は、筑紫野市教育委員会社会教育課（当時）が実施した。
3. 調査対象地は、筑紫野市塔原685番地（現塔原東3丁目3番40号）で開発対象面積2,220㎡である。
4. 試掘調査から契約に至るまでの業務は、渡邊和子（当時社会教育課文化財担当技師）が行った。
5. 発掘調査は、藤尾薫（当時社会教育課文化財担当技師）が行い、草場啓一・樋口久美子（当時社会教育課文化財担当技師）が応援体制をとった。
6. 調査にかかる一部の実測・写真撮影は藤尾・樋口が行い、全体遺構図については、(株)埋蔵文化財サポートシステムに写真測量業務を委託した。
7. 報告にあたっては、遺構の性格付けを行い、柵をSA、掘立柱建物をSB、性格不明遺構をSX、土坑をSK、溝状遺構をSDの略号とした。番号については遺物取り上げの番号をそのまま付したものと整理報告の過程で追加・変更したものがある。
8. 出土遺物の実測は一部について渡邊が、他は(株)埋蔵文化財サポートシステムにまた出土遺物の写真撮影は(有)文化財写真工房に委託した。遺物の挿図番号と図版番号は同一であり、遺物写真の大きさは不統一である。
9. 本報告で記載する時期区分については、下記の文献を参考にした。
「大宰府条坊跡Ⅱ」 太宰府市の文化財第7集 1983 太宰府市教育委員会
「大宰府条坊跡XV」 太宰府市の文化財第49集 2000 太宰府市教育委員会
「大宰府条坊跡XⅥ」 太宰府市の文化財第52集 2002 太宰府市教育委員会
10. 本書で示す遺物の色については、農林水産省農林水産技術会・(財)日本色彩研究所監修「新版標準土色帳」を基準とした。
11. 報告書掲載挿図の製図については、(株)タクトに委託し一部を渡邊が行った。
12. 挿図中に使用した方位は、すべて座標北を記している。
13. 本書の執筆・編集は、渡邊が行った。

目 次

本 文	頁		頁
1. はじめに	3	④S K	7
2. 位置と環境	4	⑤S D	10~19
3. 調査の内容	4	⑥S X	20
①層序	4	⑦P i t	22
②S A (柵列)	6	⑧T L出土遺物	23
③S B (掘立柱建物)	7	4. まとめ	26

Fig. (挿図)

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S 1/20,000)	1	Fig. 12 S D 4・5位置図 (S 1/200)	14
Fig. 2 周辺地形図 (S 1/2,500) ...	2	Fig. 13 S D 1 出土遺物実測図 (S 1/3) ...	16
Fig. 3 遺構配置図 (S 1/200)	折込	Fig. 14 S D 2・13位置図 (S 1/200) ...	17
Fig. 4 S A実測図 (S 1/60)	5	Fig. 15 S D 2 出土遺物実測図 (S 1/3) ...	18
Fig. 5 S A実測図 (S 1/60)	7	Fig. 16 S D 出土遺物実測図 (S 2/3・1/3)	19
Fig. 6 S B実測図 (S 1/60)	7	Fig. 17 S X実測図 (S 1/60)	21
Fig. 7 S K実測図 (S 1/60)	9	Fig. 18 P i t 出土遺物実測図 (S 1/3)	22
Fig. 8 S K 1 出土遺物実測図 (S 1/4)	10	Fig. 19 T L 出土遺物実測図 (S 1/3)	23
Fig. 9 S D 1・3位置図 (S 1/200)	11	Fig. 20 条坊第136次との遺構関連図	
Fig. 10 S D 3 出土遺物実測図 (S 1/3)	12	(S 1/400)	24
Fig. 11 S D実測図 (S 1/80)	折込	Fig. 21 条坊第136次・185次調査区画溝位置図	
		(S 1/400)	25

P L. (写真図版)

P L. 1 全景	3	P L. 7 出土遺物	18
P L. 2 出土遺物	10	P L. 8 出土遺物	19
P L. 3 出土遺物	12	P L. 9 S X 1	20
P L. 4 S D 3	13	P L. 10 出土遺物	22
P L. 5 S D 4・5周辺	15	P L. 11 出土遺物	23
P L. 6 出土遺物	16		



Fig.1 周辺遺跡分布図 (S 1/20,000)

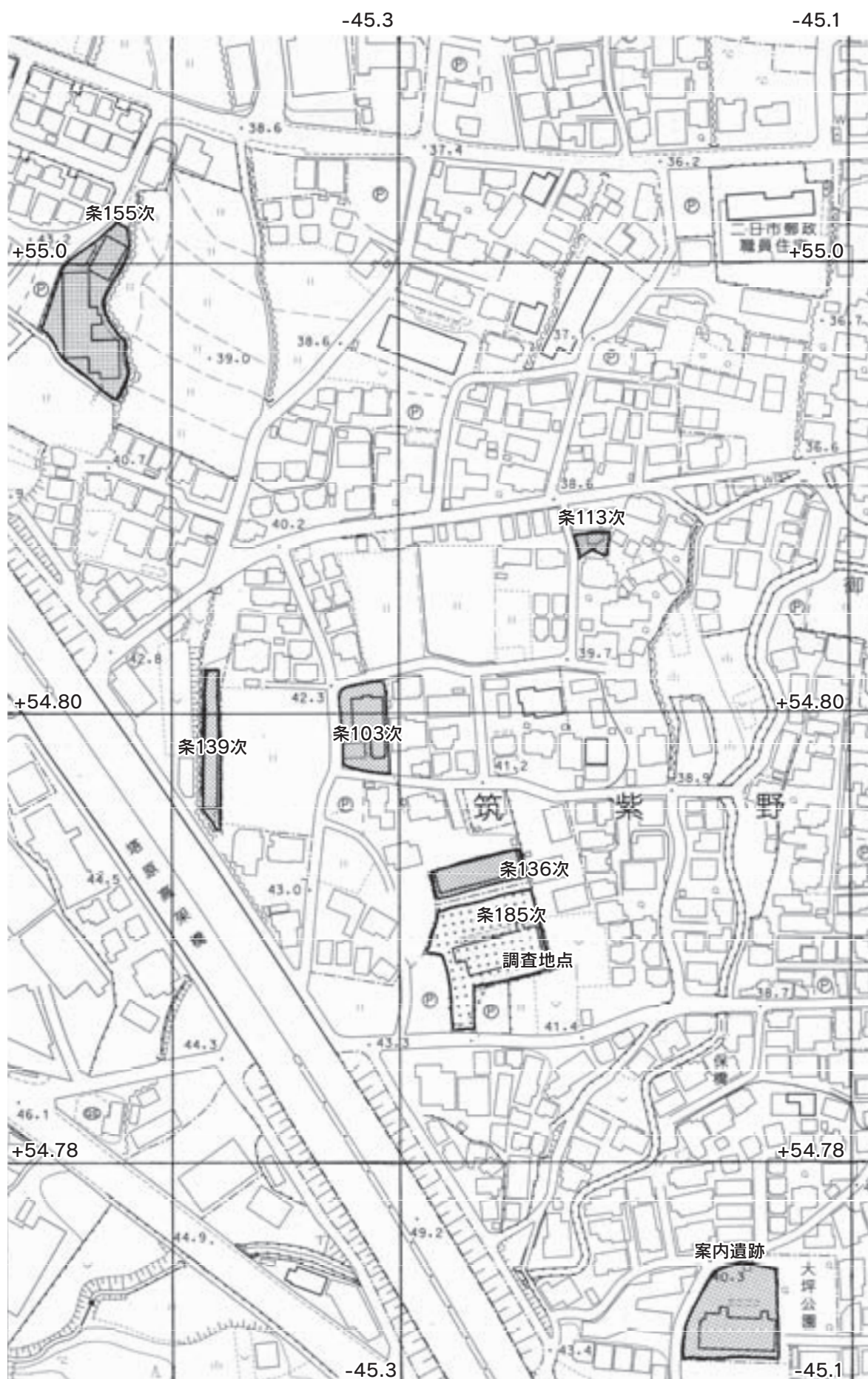


Fig.2 周辺地形図 (S1/2,500)



Fig.3 遺構配置図 (S1/200)

1. はじめに

平成5年10月10日付けで筑紫野市都市計画課より筑紫野市教育委員会(以下市教委)に対し、共同住宅建設予定地内の開発整備要綱の協議があった。

照会地筑紫野市大字塔原685番地(現塔原東3丁目3番40号)は周知の埋蔵文化財包蔵地に隣接し、北側の共同住宅建築の際にも遺跡が確認された事や工事計画の内容から事前の試掘・確認調査の実施を指導した。

事前の指導に基づき平成8年10月20日付で「埋蔵文化財の所在について」の照会があり、同月25日に市教委が試掘・確認調査を実施した。その結果、密度は薄いが開発対象地全域に遺構が検出された。この試掘・確認調査の報告を同月22日付で回答し、工事着手60日前までに文化財保護法第57条の2第1項(現第93条の第1項)の届出の必要性を事業者に伝えた。その後文化財保護法に基づく届出が提出され、市教委は県教育委員会(以下県教委)に進達した。翌月8日付で工事着手前に発掘調査を実施する旨の通知が県教委からあり事業者に伝えた。直ちに事業者から市教委に対し発掘調査の依頼がなされ、その後具体的な発掘調査実施の協議を行った。

平成8年11月14日に「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結し、同年12月2日から平成9年3月31日まで現地で発掘調査を行い、整理報告書の作成は平成12年度より調査担当者から渡邊が引き継いで行った。

なお開発対象地の面積は2,220㎡で発掘調査面積は1,780㎡である。



PL.1 全景

2. 位置と環境

筑紫野市は福岡市と久留米市のほぼ中間に位置する。市中心部には国道3号線・JR鹿児島・長崎本線・九州縦貫道・西鉄大牟田線などの九州の南北を結ぶ基幹動脈が縦走し、交通の要衝となっている。市域北部は太宰府市に、北東部は糟屋郡宇美町、西側は大野城市・筑紫郡那珂川町、南側は小郡市・朝倉郡筑前町（旧夜須町）・佐賀県三養基市にそれぞれ接する。市の北から東にかけては三郡山系の四王寺山、愛嶽山、宝満山などの山々が、また西には背振山地から続く牛頸山、矢岳、城山などの牛頸低山地がある。この両山系に囲まれた最も低い位置は阿蘇4火砕流の主たる流路となり、この流路が狭長な二日市平野を形成する。また平野部は福岡平野と筑紫平野の分水嶺ともなっている。市中心部には鷺田川流れ、太宰府市通古賀付近で合流し御笠川として福岡平野を北流し博多湾へと注ぐ。この鷺田川の流域には数多くの遺跡が所在している。

調査地点は、この狭小な平野の西側、背振山地から続く牛頸低山地の一つ天拝山麓から鷺田川に向かう扇状地上にあり、鏡山猛氏の「大宰府都城の研究」による推定条坊右郭二十二条五坊から南側にやや外れて位置し、平成5年に調査された大宰府条坊跡第136次の南側に隣接し所在している。また、調査区の西1.8kmには塔原の地名の由来となった塔原廃寺の塔心礎がある。

3. 調査の内容

検出された遺構は、S A (柵跡)9列、S B (掘立柱建物跡)1棟、S X (性格不明遺構)5軒、S K (土抗)17基、S D (溝)30条、Pit (柱穴)815個となる。

報告書作成の整理を進める中で1～4の問題点が浮上したため、調査完了後の遺構図の一部について、写真測量用の伸ばし写真から可能性のあるものは推定し、復原報告する事とした。なお復原した遺構については遺構配置図にアミ掛けで表現した。

ただし、完掘された遺構について疑問があるものは本文中に不整合を指摘し、可能性を記したが、遺構図は当初調査の成果のままとした。

1. 遺構図面と遺構番号の不整合について

- A. G1改めSX1 (性格不明遺構) B. G2改めSX4 C. G3改め暗渠
D. S1改めSK3 E. S2改めSK4 F. G4改めSX2

2. 写真測量図化を基に遺構復原作業を実施し、推定できる遺構の平面プラン復原1における遺構の復原

3. 土層図と平面図の不整合についての確認 (SD2・SD13)

4. 遺構の重複についての確認 (SD2と下層の土坑との関係)

①基本層序

厚さ20～30cmの耕作土を剥土すると遺構検出面となる。北側の条坊136次調査では耕作土の下に真砂土に似た黄褐色砂質土が20cm前後の厚みで堆積し、これが遺構検出面となっていた。しかし今回の条坊185次調査では、この層は調査区の北側に僅かに残るが全体的に削平されている。また部分的に黒褐色砂質層が地山となる。

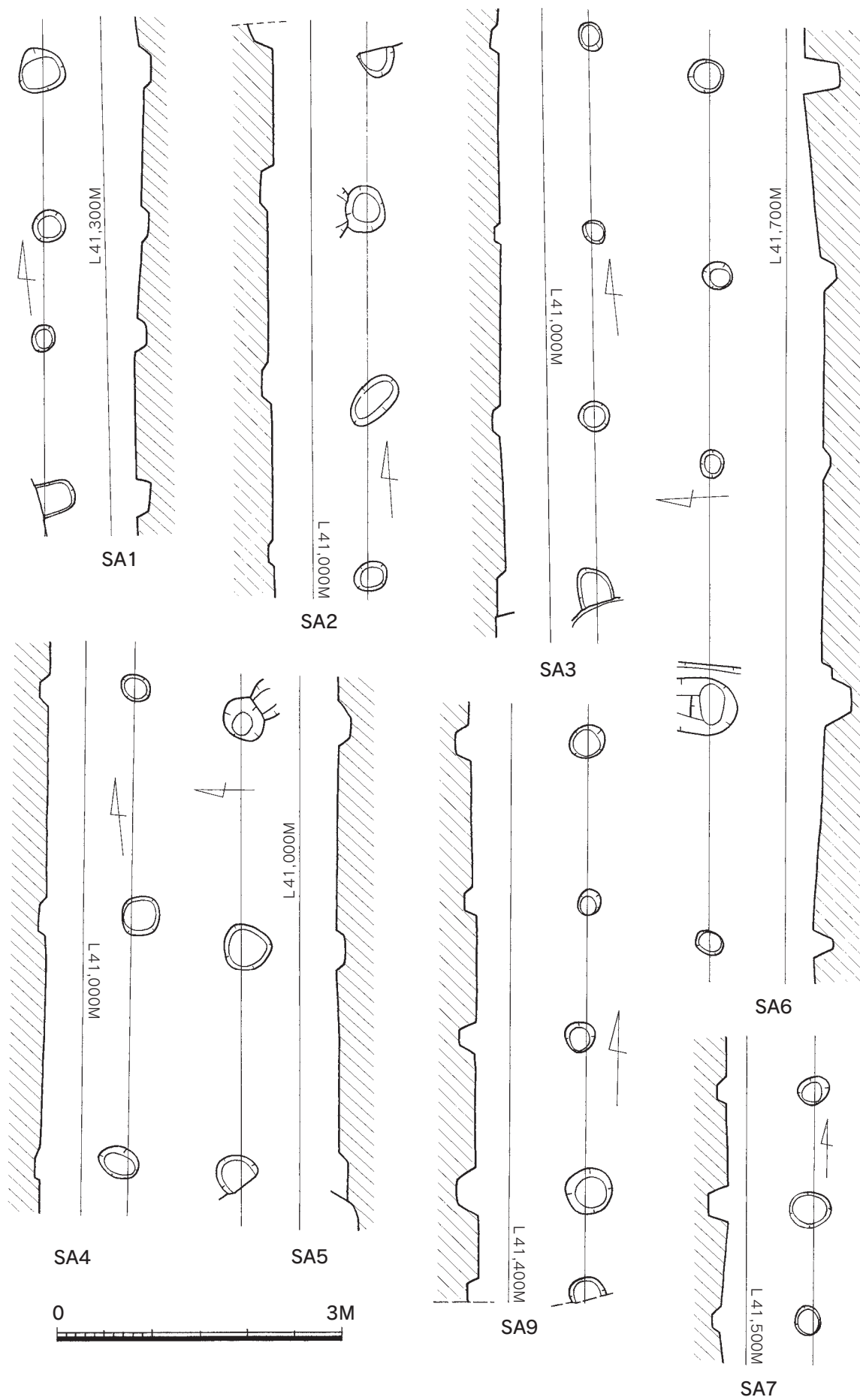


Fig.4 S A実測図 (S1/60)

② S A（柵列）

S A 1 は、調査区北西隅のSD5とSD14の空間に位置する南北に延びる柵である。主軸方向はN-6°-Eにとる。柱穴はやや角張る形状と円形の形状をなし、柱穴の大きさは径25～30cm、深さ10cm前後で、柱間寸法は1.5～1.8m(5～6尺)を測る。遺物は時期の決定できるものは出土していない。

S A 2、調査区北側のSD2とSD4に挟まれた空間の中央付近に位置し、北側の未調査区へと続く南北に延びる柵である。主軸方向はN-6°-Eにとる。柱穴の形状は、やや楕円形の形状と不整円形をなす。規模は径30～50cm、深さ10cm前後で、柱間寸法は1.8m(6尺)を測る。遺物は時期決定できるものは出土していないが、東側にあるSB1の主軸方向にほぼ一致しており、SB1と同時期のものと考えてよいと思われる。

S A 3、SA2の東側、SB1との間に位置する南北に延びる柵である。主軸方向はN-4°-EでSA2と6mの間隔をとり、ほぼ並行して延びる。柱穴はSA2と同じく、やや楕円形と不整円形の形状をなす。大きさは径30～50cm、深さ10cm前後で、柱間寸法は1.8m(6尺)を測る。遺物は時期決定できるものは出土していないが、これもSA2と同様SB1と同時期のものと考えてよいと思われる。

S A 4は、調査区北東部SB1の南側に位置する。主軸方向をN-6°-Eにとる南北に延びる柵である。柱穴は、楕円形と円形の形状をなす。柱穴の大きさは径40cm、深さ8cm前後で、柱間寸法は2.4m(8尺)を測る。遺物は時期決定できるものは出土していないが、主軸がSD2にほぼ一致する事からSD2と同時期のものと考えてよいと思われる。

S A 5、調査区北部SA4の南側、SD2とSD4の間に位置しSD4に切られる。主軸方向をN-90°-Eにとる東西に延びる柵である。柱穴は不整円形の形状をなし、大きさは径30～40cm、深さ10～20cm、柱間寸法は2.1m(7尺)を測る。遺物は時期決定できるものは出土していない。

S A 6は、調査区南側、SD10とSD11を横断し、SD11と切りあうが新旧関係を確認できない。主軸方向はN-87°-Wにとる東西に延びる柵である。柱穴は不整円形の形状をなし、大きさは径30～40cm、深さ10～20cm、柱間寸法は2.1～2.4m(7～8尺)を測る。遺物は時期決定できるものは出土していない。

S A 7、調査区南側、SK15の西壁に沿うように検出された。主軸方向はN-1°-Wの南北に延びる柵である。柱穴形状は不整円形をなし、径30～40cm、深さ15cmの大きさとなる。柱間寸法は1.2m(4尺)を測る。今回検出された柵列のなかでは柱間は狭い。遺物に時期決定できるものはない。

S A 8、調査区南端、試掘トレンチに沿うように検出された。主軸方向はN-1°-Wの南北に延びる柵である。柱穴の形状は不整円形で、径30～40cm、深さ10～20cmの大きさとなる。柱間寸法は1.8m(6尺)を測る。遺物は時期決定できるものは出土していない。

S A 9、調査区東側、SD1とSK2の間で検出。主軸方向はN-2°-Eにとる南北に延びる柵である。柱穴は不整円形の形状をなし、径30～40cm、深さ10～20cmの

大きさに柱間寸法は1.8m(6尺)を測る。遺物に時期決定できるものは出土していない。主軸はSD1にほぼ並行し、SD1と同時期のものと思われる。

③SB（掘立柱建物跡）

SB1は調査区北東隅で検出された。主軸はN-3°-Eにとる2間×3間の東西棟である。梁行3m、桁行4.8mで、床面積14.4m²を測る。全体の柱穴の形状は円形で、径35cm、深さ10~20cmとほぼ同様な大きさとなる。建物の筋は北側の条坊第136次調査SB1の位置とほぼ合致する。

④SK（土坑）

SK1は調査区南東隅で検出。不整な長方形の形状をなし、長軸2m、短軸1.1~1.3m、深さ8~10cmを測る。主軸はN-17°-Wにとり、床面は平坦、壁は斜めに立ち上がる。床面が確実に検出されていない。出土遺物は、Fig.8-1の土師器甕片。器高14.4cmを測る。胴部中位に最大径がある。調整は内面ケズリ、外面にはハケ目が施されている。外面の色調は、にぶい黄橙色10YR6/4、内面灰黄褐色10YR4/2を呈す。胎土には石英粒を多く含んでいるが焼成は良い。5世紀中頃のもの。

SK2はSK1の西側に位置する。不整な隅丸長方形の形状をなし、南側の未調査区へと続く。検出長3m、幅0.8~1m、深さ8~10cmを測る。主軸はN-25°-Wにとり、床面は平坦、壁は斜めに立ち上がる。

SK3は調査区の北西側、SD13の北に位置する。形状は楕円形をなす。長軸1.3m、幅1m、深さ8~10cmを測る。主軸はN-30°-Wにとり、床面は平坦、壁は斜めに立ち上がる。

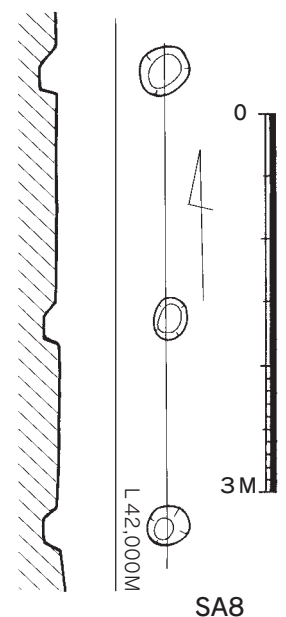


Fig.5 SA実測図 (S1/60)

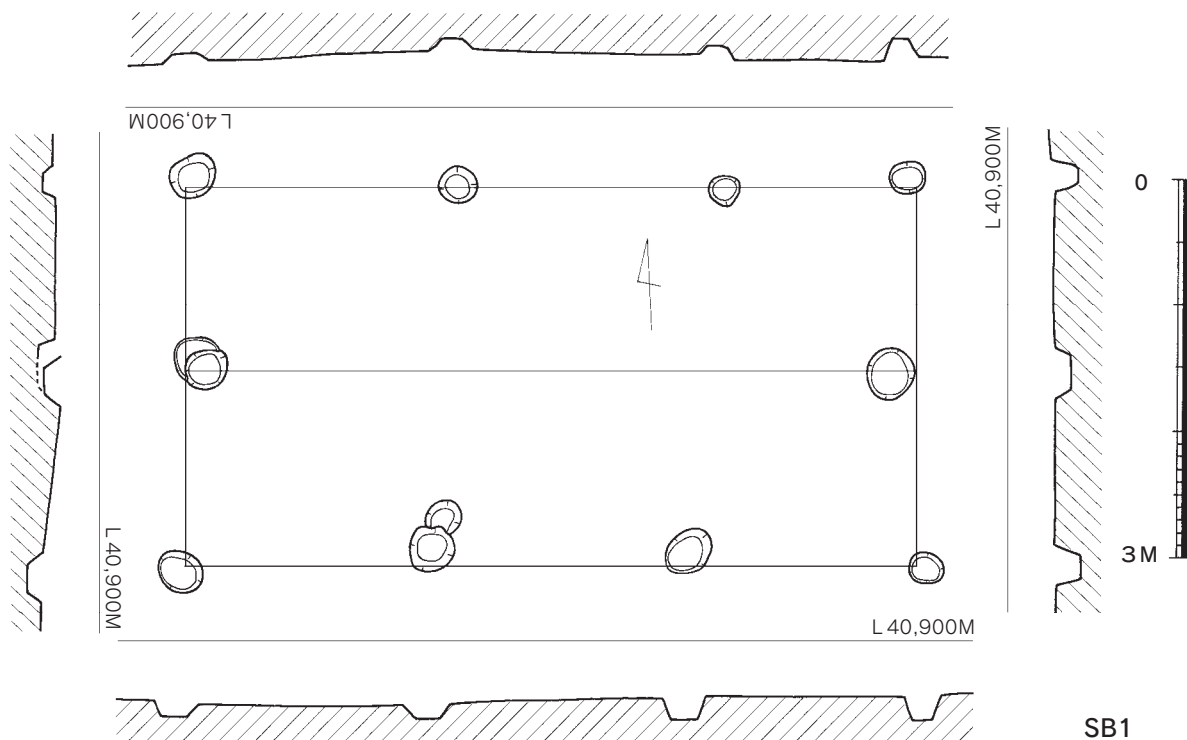


Fig.6 SB実測図 (S1/60)

SK4は調査区の西端中央部で検出。2基の不整隅丸長方形が「く」の字に合わさった形状で、長軸3.1m、短軸0.6～0.8m、深さ10～15cmを測るが、北側隅だけが30cmと深くなっている。主軸はN-10°-Wにとり、南側の床面は平坦だが中央部から北へ向かって斜めに下がる。壁は斜めに立ち上がる部分と弧を描くように立ち上がる所もある。井戸の可能性が考えられるが追認できなかった。

SK5は調査区の北側、SD2とSD4の間に位置し、SA4の西側、SA5の北側にある。形状は楕円形をなす。検出長4m、幅は東側1.2m、中央部2.75m、西側2.55m、深さ10cmを測る。主軸はN-10°-Wにとり、床面は全体に凹凸がある。壁は緩やかに斜めに立ち上がる。

SK6、調査区の北側、SA4の西側、SK5の北側にある。形状は楕円形をなす。検出長2.15m、幅は東側0.9m、中央部～西側は1.9m、深さ10cmを測る。主軸はN-49°-Eにとり、床面には1個のPitがあるが、この土坑に伴うかはわからない。床面は平坦でなく凹凸がある。壁は緩やかに斜めに立ち上がる。

SK7、調査区の北側、SB1の南側、SA3の東側にある。形状は不整な楕円形をなす。検出長4.18m、幅は北側0.85～0.9m、中央部～南側は2.1～2.9m、深さ10cmを測る。主軸はN-42°-Wにとり、床面には13個のPitがあるが、この土坑に伴うかはわからない。床面は平坦でなく凹凸がある。壁は緩やかに斜めに立ち上がる。当初述べた様に遺構認識の出来ていないものに該当し、周辺部を不自然に掘り下げている。もしかするとここにも住居跡があった可能性はあるが追認できなかった。

SK8、調査区の北側SA4の東、SD2の西側にある。形状はやや中ぶくらみした隅丸長方形をなす。検出長1.6m、幅は南側0.65m、中央部0.82m、北側は0.75m、深さ10cmを測る。主軸はN-31°-Eにとり、壁は緩やかに斜めに立ち上がる。床面は平坦。

SK9は、調査区の北、SD5の東にあってSD14の南に位置。形状は隅丸方形をなす。一辺長1.2～1.3mで、深さ10cmを測る。主軸はN-25°-Eにとり、壁は直に立ち上がる。床面は平坦となる。

SK11、調査区の西隅、SK4に隣接する。形状は隅丸長方形をなす。検出長1.4m、幅は北側0.55m、南側は0.65m、深さ20～28cmを測る。主軸はN-22°-Wに壁は直に立ち上がり、床面は平坦となる。SK4と切り合っていた可能性があったため追認したが明確にできなかった。

SK15、調査区の南東、SA7の東に位置する。西側は未調査区に続く。形状は不整な隅丸長方形をなす可能性がある。西壁長4.2m、東壁長3.2mで、検出幅は1.7m、深さは16～20cmを測る。主軸はN-5°-Eに、壁は緩やかに立ち上がり、床面は平坦となる。住居跡の可能性も考えられたが追認できなかった。

SK16、調査区の南西、SX1の中央部ある。住居跡の中央土坑の可能性もあるが、現状では確認できない。形状は丸みのある二等辺三角形をなす。検出長2.15m、幅は東側0.9m、中央部～西側は1.9m、深さ10cmを測る。主軸はN-10°-Wにとり、床面には2個のPitがあるが、この土坑に伴うかはわからない。床面は平坦でなく凹凸がある。壁は緩やかに斜めに立ち上がる。

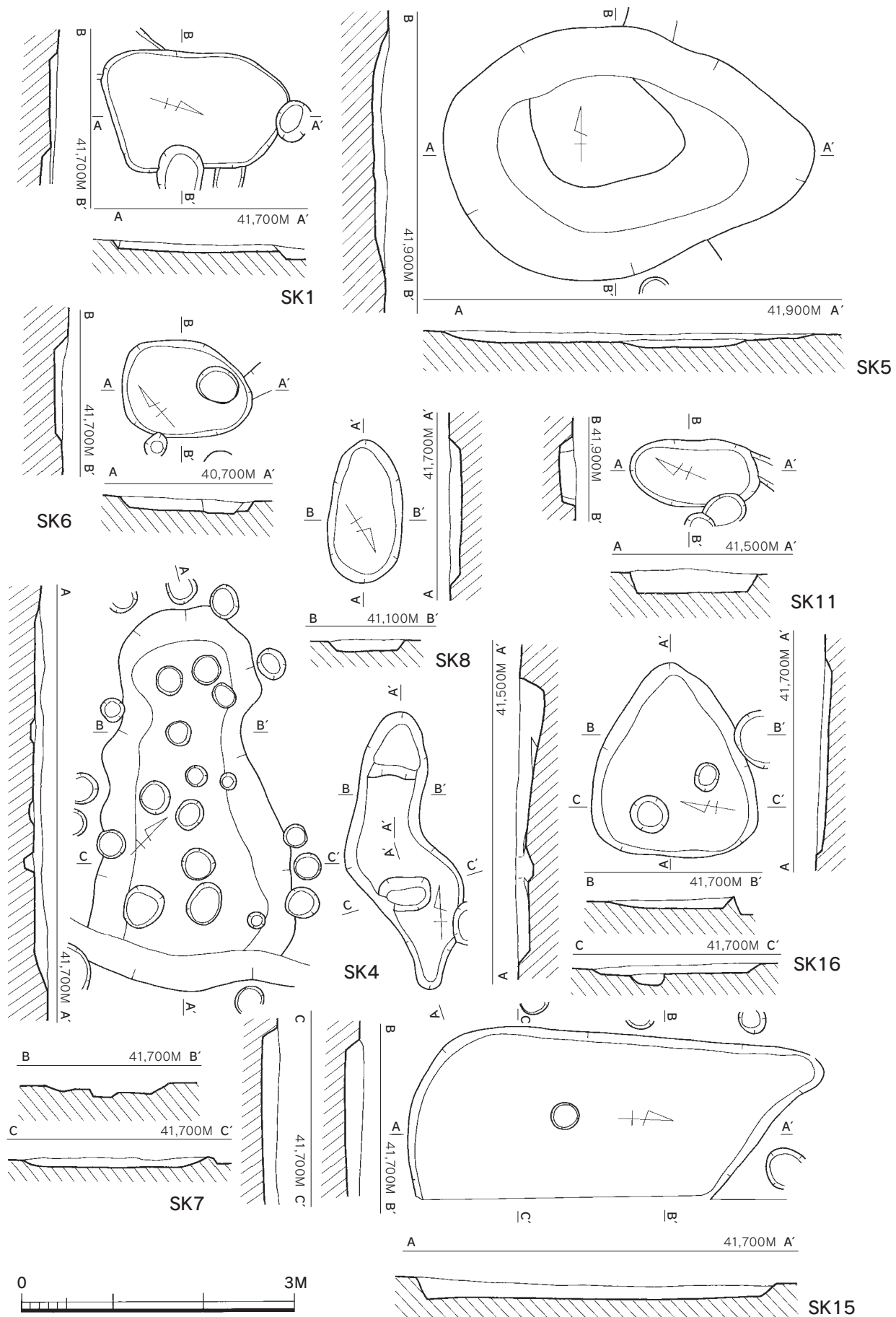


Fig.7 S K実測図 (S1/60)

⑤ S D（溝状遺構）

S D 1 調査区の南、SA9の西側、SD27を切る。主軸はN-0°-5'-Eにとる。未調査区から北へ10m直進し、そこから緩やかに東側に「く」の字に曲がり1.5m延びて終息する南北溝である。幅は32~70cm、深さは40cm前後で断面形状はU字形をなす。

出土遺物（Fig.13—6~19、PL.6）

6は復元口径8.6cm、底径6.9cm、器高1.35cmの小皿a。内外面ともに灰白色10YR8/2の色調を呈し、調整は内外にナデが施され、外底面には板状圧痕がのこる。**7**の小皿aは復元口径9.6cm、底径7.1cm、器高1.35cmを測り、内外ともに灰白色10YR8/2の色調をなす。内面はナデ、外底面はヘラによる切り離し後ナデが施されている。**6・7**ともに胎土には砂粒が少量含まれるが、焼成は良い。**8**は小皿aで器高1cm、胎土に砂粒が少量と赤褐色粒が含まれる。口径15cm、器高3.5cmを測る坏aの**9**は、胎土には石英粒を多く含み、焼成は普通。内外ともに摩滅が著しい。**10**は復元口径14.2cm、器高3.25cmの坏aで、胎土には少量の砂粒とウンモを含み焼成は良い。底面はヘラ切り離し後ナデ調整がなされるが、板状圧痕がのこる。**11**は皿aの破片で残存器高3cmを測り、外底面に板状圧痕がのこる。**12**、復元口径15cm、残存高2.5cmの坏aで外面にススが付着する。**13**は復元口径15.8cm、残存高2.8cmの坏aで、内外ともにナデによる調整が施される。**14**は復元口径14.2cm、底径5.8cm、器高3.7cmの坏dで、外面は灰白色10YR8/2、内面浅黄橙色10YR8/3の色調を呈す。胎土には少量の石英が含まれ、焼成はあまい。**17**は口径15.2cm、高台径5.4cm、器高6.4cmの白磁碗。素地は灰白色で精緻、内面と外面胴部までに施釉が、胴部下位から高台は露胎。**18**、残存高6.1cm、高台径6.3cmの白磁碗。施釉は内外面になされ、高台のみ露胎する。釉調は白灰色で光沢がありガラス質である。**19**は残存高5cm、底径4.7cm、胴部径4.8cmの土製品。胴部には鋸歯状の二段の線刻が、また底面にも放射線状の線刻がある。どちらにも規則性はない。**6~8**は大宰府編年XⅢ期、**9・10**は大宰府編年XⅡ期、**11~14**は大宰府編年XⅣ期、**17・18**は大宰府編年白磁碗V類1bに該当する。

S D 2 調査区の北東隅から26m南へ延びて、西側へ直角に2.7m曲がる逆「L」字状に途切れる南北溝で、主軸はN-2°-Eにとる。北側の幅は60cm、屈曲点から幅が広がり最大幅1mとなる。深さは35cmで断面形状は逆台形をなす。これが図面より示されるデータである。当初述べたように遺構の重複についての確認作業を実施した。まずPL.5で確認できる様にSD2は写真測量の段階では「L」字状には屈曲していない。

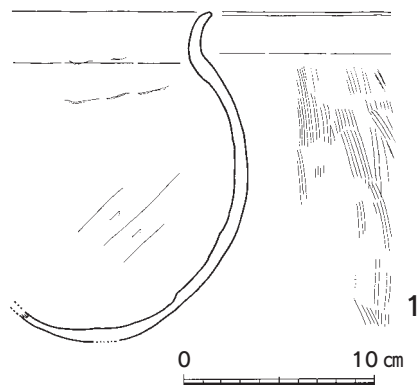


Fig.8 SK1出土遺物実測図 (S1/4)

PL.2 出土遺物

屈曲部分について精査確認すると写真でも遺構のプランがウッスラ確認でき、写真測量撮影後に掘り下げ、別の遺構番号を付すのを省略し、そのままSD2と付していた。写真上ではSD2は直進する南北溝となるが屈曲部分には、SD2の他に土坑と小溝が重複して所在する。(また筑紫野市史、資料編(上)ではSD1と掲載したが、ここで改めてSD2と訂正しておく。)しかしSD2については次の可能性をのこす。土層図から確認できる当初のSD2は北東側の始まりから11mまでの断面は二段の逆台形形状で、幅もSD1やSD3と同規模の溝となる可能性がある。しかし試掘トレンチ付近 (Fig.3 遺構配置図参照)で溝の幅が急激に広がり、深さも倍以上のものとなって直進して終息する。この幅広になる付近から直進して終息する別の溝が存在した可能性もあるが、直進する深い溝と当初のSD2と新旧関係になるのかあるいは溝の堀直しが行われたのかの二つの考え方ができる。残念ながら、このトレンチ付近での土層図が作成されていないために断定はできない。遺物の取り上げも三つの遺構のものが混在するが、図示できた遺物は、出土状況の図では直進した深い溝から出土した事は確実である。ここでSD2の可能性について整理すると①屈曲部分には幅の狭い溝と土坑状の遺構が存在する。②屈曲部分の土坑はSD2より古い。③屈曲部の幅の狭い溝は、幅・深さは北東付近と同規模になる。これを本来のSD2とすれば、直進した溝は逆「L」字状に延びて、SD2は屈曲した溝となり、遺構の新旧関係もSD4より新しいと位置づけらる。

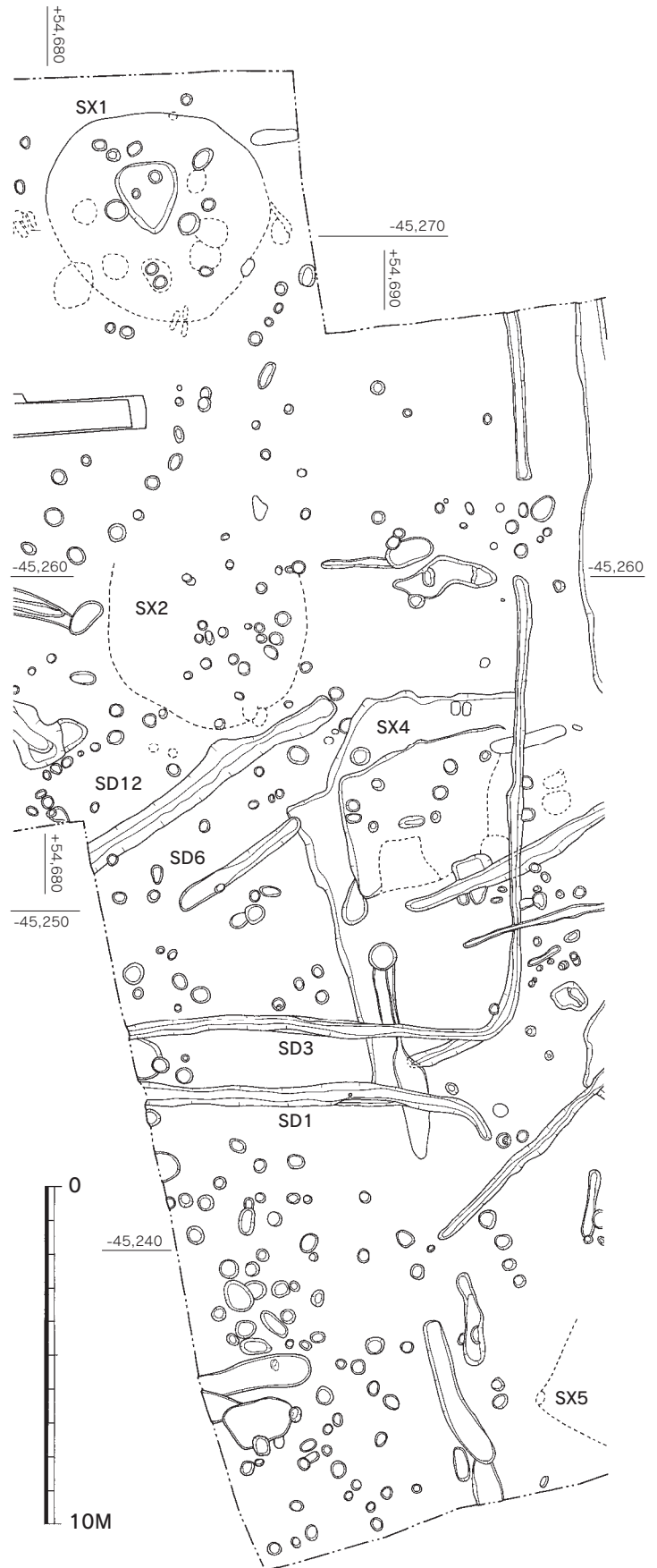


Fig.9 SD1・3位置図 (S1/200)

出土遺物 (Fig.15—20~32、PL.7)

20~27は小皿aで、20・22・23・27の器高は0.9~1.35cm、口径8.85~9.2cmで底面にはヘラ切り離し後ナデ調整が見られる。21・24・25の底面には板状圧痕をのこす。26の底面には糸切り離しが見られる。28・29は丸底坏a。29、復元口径15.5cm、残存高3.75cm、外面体部下位にはケズリ後ナデ調整が施される。30は残存高2.8cm、高台径6cmの白磁碗。施釉は内外面に施されるが、高台は露胎となる。32は、復元口径15.3cm、器高5.5cm、高台径6cmの瓦器碗で内面口縁から体部下位までがケズリ、外面はヨコナデ後ミガキを施し、高台部の退化はない。小皿aの時期は大宰府編年XⅢ期、丸底坏a 28・29は大宰府編年XⅢ期のものに該当する。

SD3 調査区の南、SD1の西に所在してSD5を切っている。南北の主軸はN-2°-Eにとる。SD1と同様に未調査区から北へ10.6m直進し、そこから西側に直角に曲がり14m延びて途切れる。また2mの間をにおいて同様な規模の溝が西側に5m延びて未調査区へと続く。この途切れた部分は、調査を二分割して反転した場所で写真測量写真がなく確認できない。またPitが存在しているため掘削していない可能性もあるが、追認できなかった。現況図のまま途切れた溝としておく。この溝の主軸は、ほぼ東西に一致して、SD3の平面は逆「L」字状の溝から不連続に続く溝をもつ。東西・南北ともに幅60cmで、深さは20~27cmを測る。溝の断面は逆台形の形状となる。但しコーナー部分にはSD7が重複するが、この新旧関係も追認作業では捉えられなかった。また重複の結果このコーナー部分はやや丸みを持ち、僅かだが広がる。検出された溝と未調査区へ続く事を含んで、この溝は区画溝と考えたい。

SD1・SD3について

両溝からは、ほぼ同時期の遺物の出土がある。SD1には南北溝から続く東西溝が検出されていないが、ほぼ同時期に所在した区画溝としておきたい。

出土遺物 (Fig.10—2~5、PL.3)

2~4は残存高2.8~3.3cmの坏aの小片。2は外面体部下位から底面までケズリにて調整。ともに胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良い。5、復元口径14.5cm、器高3cmを測る坏aで、外面灰黄色2.5Y7/2、内面灰白色2.5Y8/2の色調を呈す。胎土には石英が含まれ、焼成は良い。外底面には粘土紐の痕跡がのこる。いずれも大宰府編年のXⅢ期に該当する。

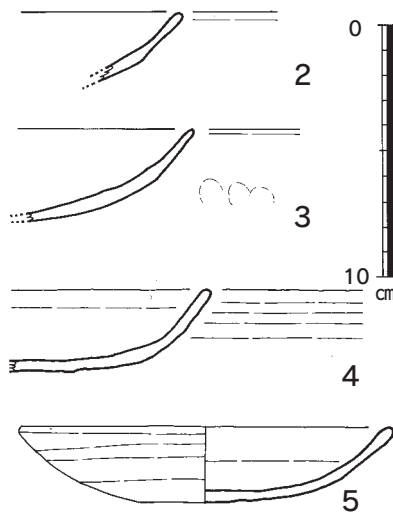
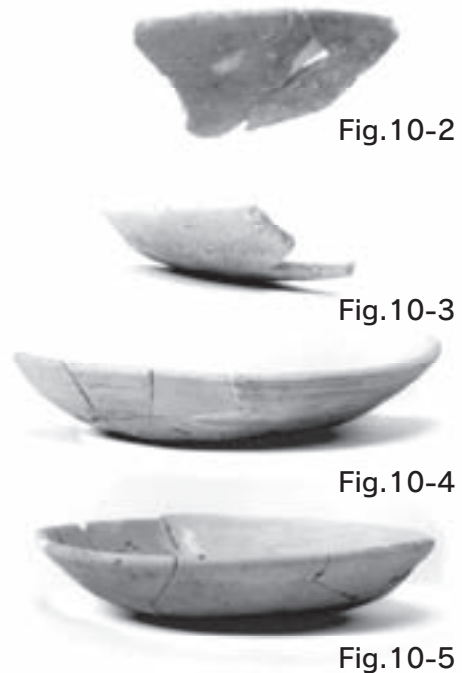


Fig.10 SD3 出土遺物実測図 (S1/3)



PL.3 出土遺物

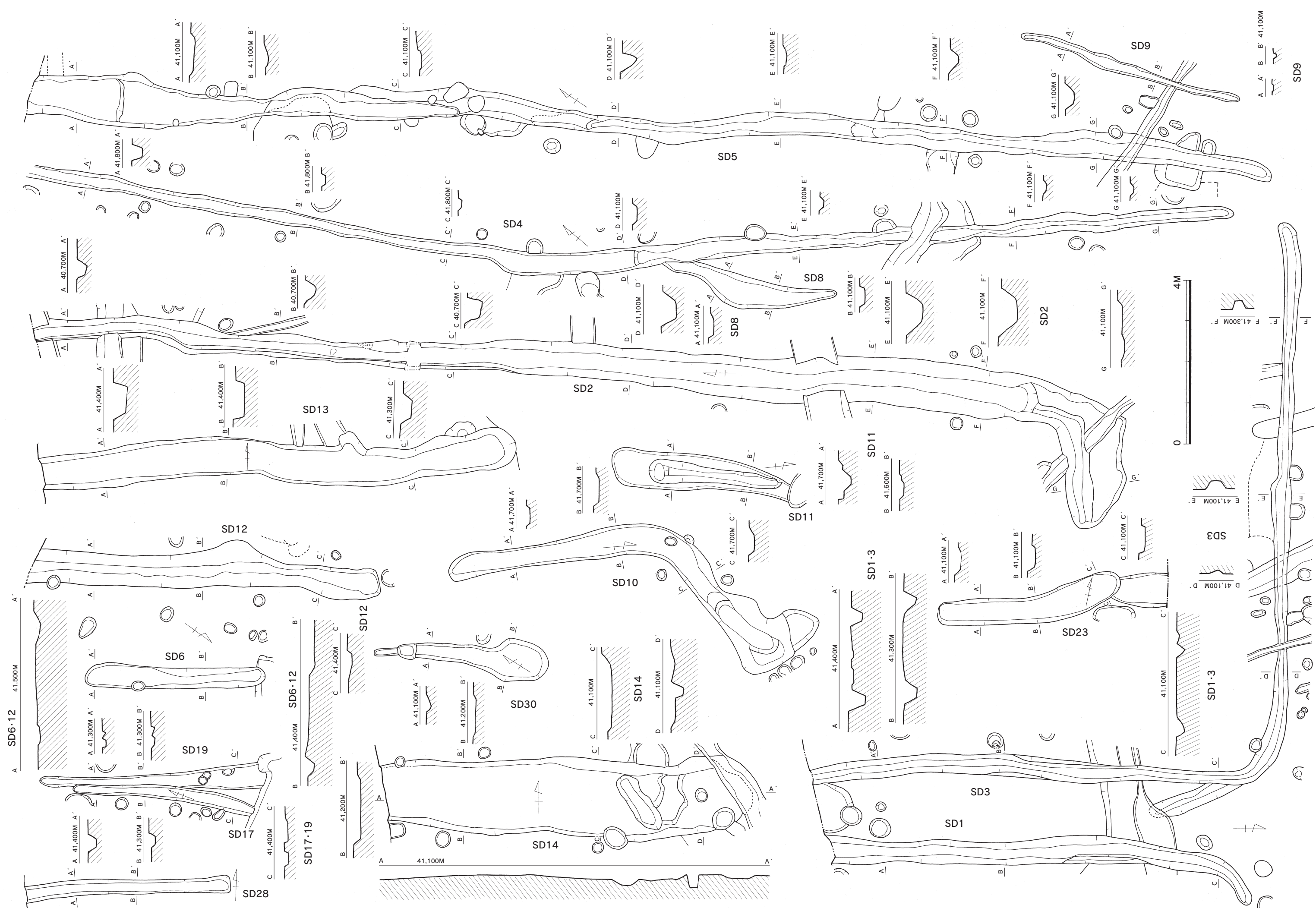


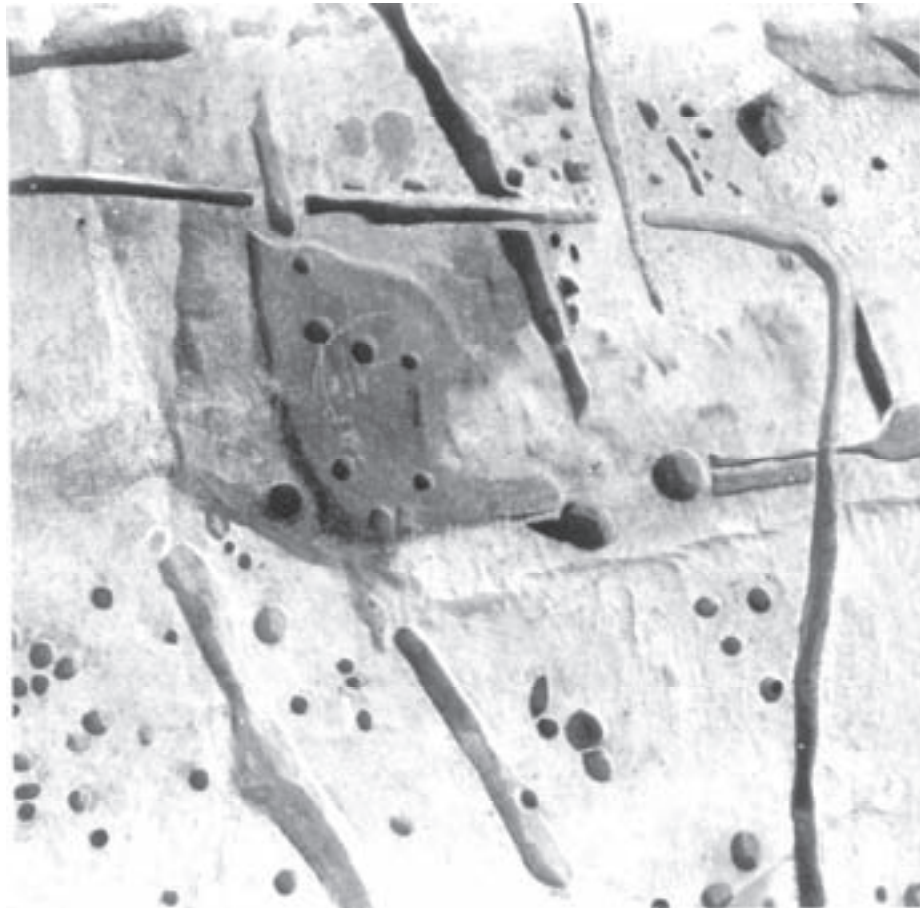
Fig.11 SD実測図 (S1/80)

SD4 調査区の北西から南東に15m南へ延び、ここから僅かだが東に振れ、そのまま南東に18m直進し途切れる。SD2に切られる可能性をもつ。主軸はN-29°-30'-Eにとる。幅は北側が50cmを測る。東に振れる地形変換点から6mまでは、幅が60cmに広がりを見せる。深さは18cmで断面は逆台形の形状をなす。

SD5 SD4に並行する溝で、北西から南南東に30m延びる。部分的に蛇行するが、ほぼ直進し途切れる。(調査ではPitと重複する箇所は掘下げていないため、追認結果は繋がりが確認できた箇所の平面図は復原した。) SD3に切られ、主軸はN-32°-Eにとる。溝幅は北西側から4mの距離までが1mになり、ここから60cmの幅に狭くなる。深さは27cmで断面は「U」字形の形状をなす。

出土遺物 (Fig.16—33~35, PL.8)

33は腰岳産黒曜石製の二等辺三角形の形状をなす石鏃。素材の黒曜石は気泡が多く、パテナが進んでいる。現存長1.8cm、幅1cmを測る。先端部は欠損し、基部には抉りはない。**34**の鉢は口径12.2cm、器高4.4cmを測る。内外面にぶい橙色7.5YR7/4の色調をなす。胎土には少量の砂粒が含まれ、焼成は悪い。内外面ともにナデにより調整。底部は回転ヘラ削りによる仕上げとなっている。**35**は甕の口縁付近の破片で、口縁部が「く」の字に外反し、最大径は口縁端部にある。器表は摩滅が著しく調整は不明。内外ともに浅黄橙色10YR8/4を呈し、胎土には石英・砂粒を多く含むが焼成は良い。**34・35**いずれも弥生終末期のものである。



PL.4 SD3

SD4とSD5について両溝の断面形状は、ほぼ同じである。両溝は一定の距離まではほぼ並行し、SD4が僅かに向きを変えるものの、ほぼ南南東に延びて終息する。この両溝を対の側溝として捉えると主軸がN-30°-Wで、溝芯芯間は4.5m、終息部付近の芯芯間は6~7.8mとなる。対になる二条の溝が存在するだけで道路跡と報告するのは根拠に乏しいが道路跡の可能性をもつとしておきたい。道路に伴う路面や基礎地業に関する根拠は、土層図がないため現況では示せないが、溝間にはSD31や意味不明の掘り込みが確認でき、また両溝の間を幾度も掘り下げたが、結果を見出せずに調査を完了させたと考えられ、中途半端な掘りこみを多くのこす。それだけに両溝間の堆積層が複雑で認識できない状況であった可能性はある。測量用の写真で確認すると小さな溝状の遺構や部分的な汚れの堆積が調査時にのこるなど、堆積層の認識が十分に把握されていない結果を示めている。

SD6 調査区の南側のSD3の西に位置する。主軸はN-25°-Wにとる。検出長4.3mの細長い土坑状の形状をなす。幅は45~60cmで深さは10cmで断面形状は逆台形をなす。

SD7 調査区のほぼ中央部SD3のコーナー部に重複し、SD27に切られる。検出長2.3mで、幅は40cmで深さは25cmで断面形状は逆台形をなす。

SD8 SD4に切られる。主軸はN-25°-Wにとる。検出長3.8mの蛇行した土坑状の形状をなす。幅は50cmで深さは10~15cmで断面形状は「U」字形をなす。

出土遺物 (Fig.17—8、PL.9)

8は残存高13.5cm、復元裾径11.2cmの器台。弥生中期中葉のもの。

SD9 SD3を切る。SD2の屈曲先端近くにある。検出長5.6m、幅20~30cmと細長い土坑の形状をなす。

深さは10cm前後で断面形状は逆台形をなす。北・南は両端とも丸くなって終息し、主軸はN-7°-Wとなる。遺物は細片ばかりで、図示できるものは出土していない。

SD10 調査区の南、SK15の西に位置し、SA6と切り合うが新旧関係は不明。検出長9mの「く」の字状に曲がる細長い土坑状の形状をなす。幅は50cmで深さは10cm前後で断面形は逆台形の形状をなす。北側の終結部分はSK14と重複しているが新旧関係は確認できない。また不自然な形状も見られ別の遺構とも切りあっていた可能性がある。

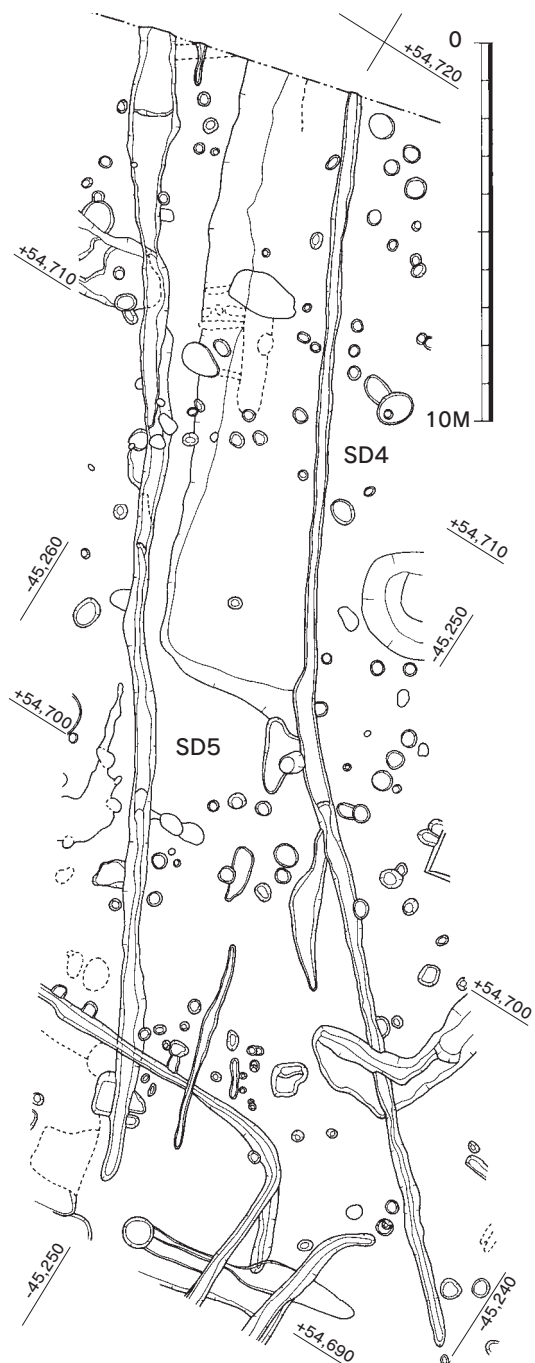


Fig.12 SD4・5位置図 (S1/200)

SD11 調査区の南、SD10の西に位置する。検出長4.3mの長い土坑状の形状をなす。遺構の中央部が二段になる。幅は90cmで深さは15～30cmで断面形状は二段の逆台形をなす。

SD12 調査区の南、SD6と並行する。検出長8.6mの長い土坑状の形状をなし、未調査区へ続く。幅は90cmで深さは10cm前後で断面形状は逆台形をなす。

出土遺物 (Fig.17—36、PL.9)

黒色土器A類碗Ⅲの破片で、残存高4.9cm、内面ミガキ、外面ケズリ後ナデにより仕上げられている。胎土には2mm以下の石英・雲母が含まれ、焼成は良い。高台の断面は台形状をなす。

SD13 調査区の西端部のほぼ中央部で検出した。SD5の西側に位置し、ほぼ東西に延びる。検出長11.6mの土坑状の形状で、やや蛇行しながら未調査区へと続く。溝東側は丸くなって終息。幅は90～100cmで、深さは20～25cmを測り、断面形状は逆台形をなす。これが遺構図から確認できるデータであるが、土層図と遺構図との不整合を精査した結果のSD13についての可能性を述べておきたい。

土層図に示される溝幅は60cm、深さ15cmにしかない。溝が掘り込まれた地山は、ある時期の生活面で本来の地山ではない。土層図では堆積層が南側からもぐりこんでいく様子が示されている。遺構図のように幅広く検出されたのは、堆積層自体を溝と認識し、堆積層を溝として掘り下げた結果、幅広の溝になった可能性は充分にある。ここではSD13の本来形状は土層図に示される幅60cm、深さ15cmが本来の規模であった可能性を補足し、SD2の一連の区画溝として捉え、SD14の対になる溝ではない事とする。Fig.14に示す様にSD2とSD13を対の同一区画溝とした。またSD2の



PL.5 SD4・5周辺

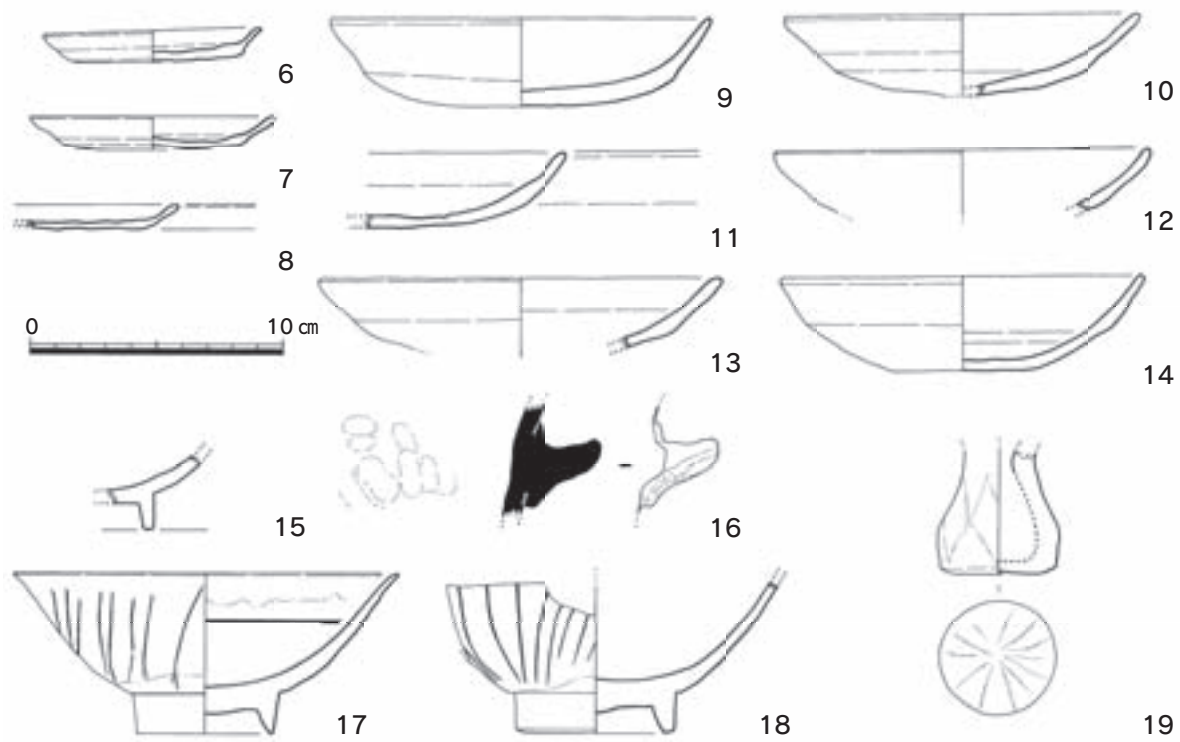
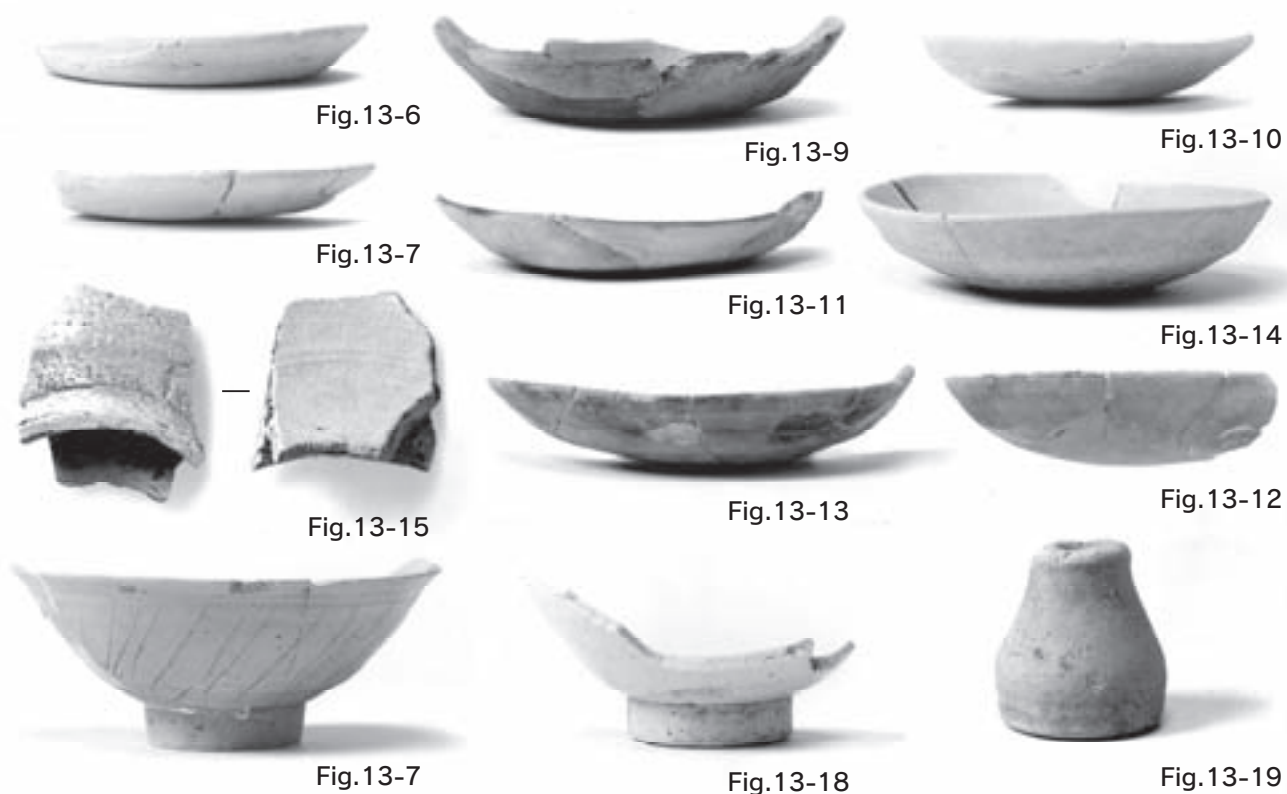


Fig.13 S D1 出土遺物実測図 (S1/3)



PL.6 出土遺物

南北側に沿って、SB1がほぼ同主軸で位置する事も踏まえ区画溝とした。

SD14 調査区北西部で検出、SD5に切られる。ほぼ東西方向に延び検出長5.1mで、幅は0.8～2m、深さも10～30cmと一定しない。未調査区へと続く、断面形状は部分的に逆台形を呈すが、遺構の下場を精査する限り溝状遺構の可能性はない。SD14も同様に条坊跡を意識するあまり土坑をSD13に並行する溝と誤認して検出した可能性が考えられる。

SD15 調査区の南、SX3の北側に位置し、検出長1.6mの細長い土坑状の形状をなし、終息している。幅は30cmで深さは10cm前後、断面形状は逆台形をなす。西側のPit部分と切りあう可能性があるが追認できなかった。

SD16 調査区の南西、SX1の南に位置する。検出長1.7m、短軸幅45～55cmの不整長方形の形状をなし、終息する。深さは10cm前後で断面形状は逆台形をなす。土坑の可能性もあるが、追認できない。

SD17 調査区の西SD13と切りあうが新旧関係は確認できない。SD19を切っている。検出長4.4mでやや曲線する細長い形状をなす。幅は30cmで深さは10cmで断面

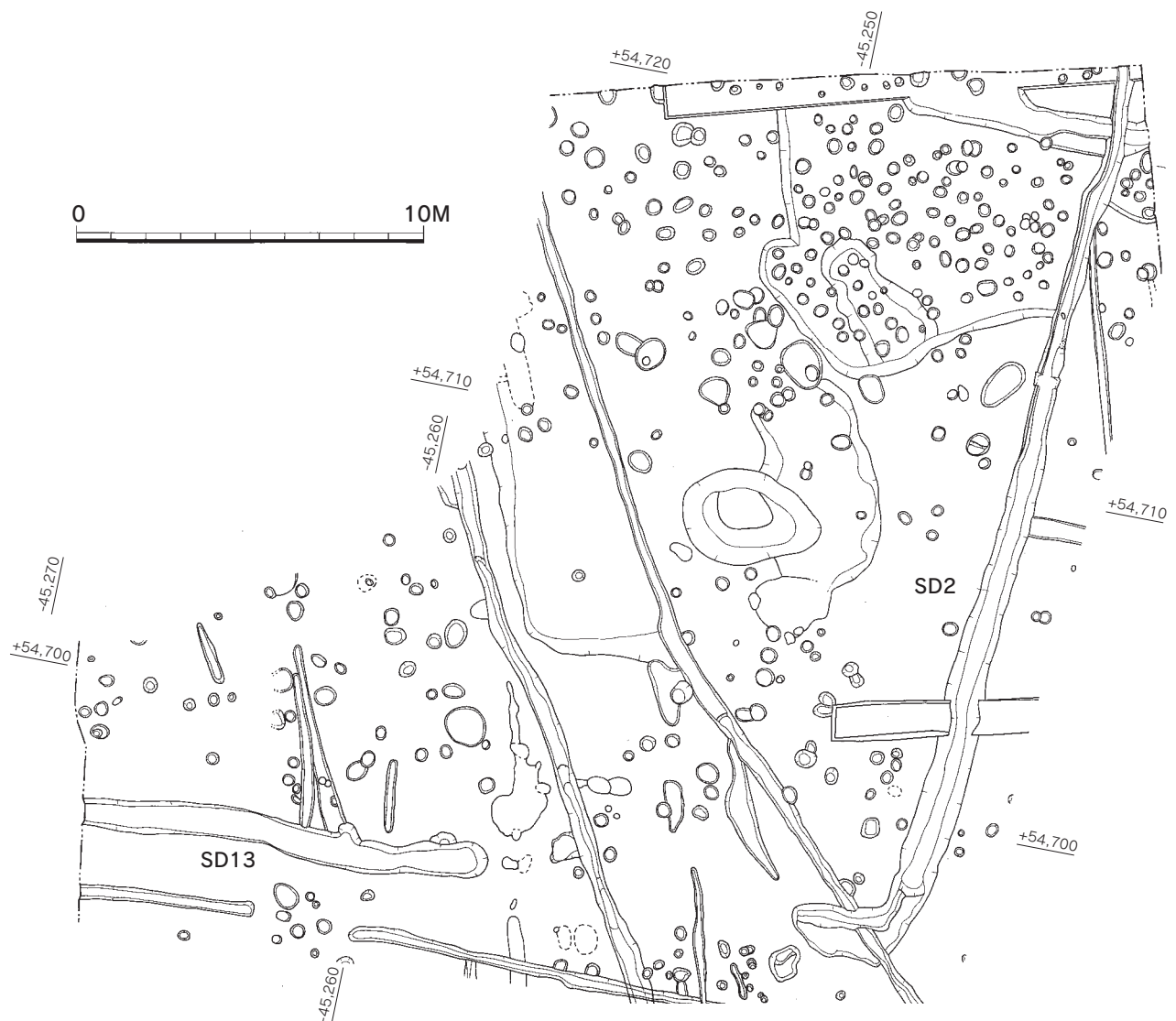


Fig.14 SD2・13位置図 (S1/200)

形状は逆台形をなし、北側の先端部分が丸く終息する。

SD18 調査区の西側、SD17とSD5の間、SD13の北側に位置する。検出長2.2m、幅25cmを測る。ほぼ南北に延びる溝で両先端部は丸く終息する。細長い形状をなす。深さは20cmで断面形状は浅い[U]字状をなす。溝の主軸は、N-5°-Wをとる。

SD19 調査区の西側、SD12の西に位置し、SD13・17に切られる。検出長5.5m、幅20～70cmを測る。西側先端部は丸く終息し、SD13と切りあう部分が最大幅の細長い形状をなす。深さは10cmで断面形状は逆台形をなす。溝の主軸はSD5にはほぼ一致する。もしかしたら同時期とも考えられるが根拠に乏しい。

SD20 調査区北西、SD5に隣接する。検出長1.2m、幅15～20cmで、未調査区へと続く。深さは20cmで、断面形状は浅い[U]字状をなす。

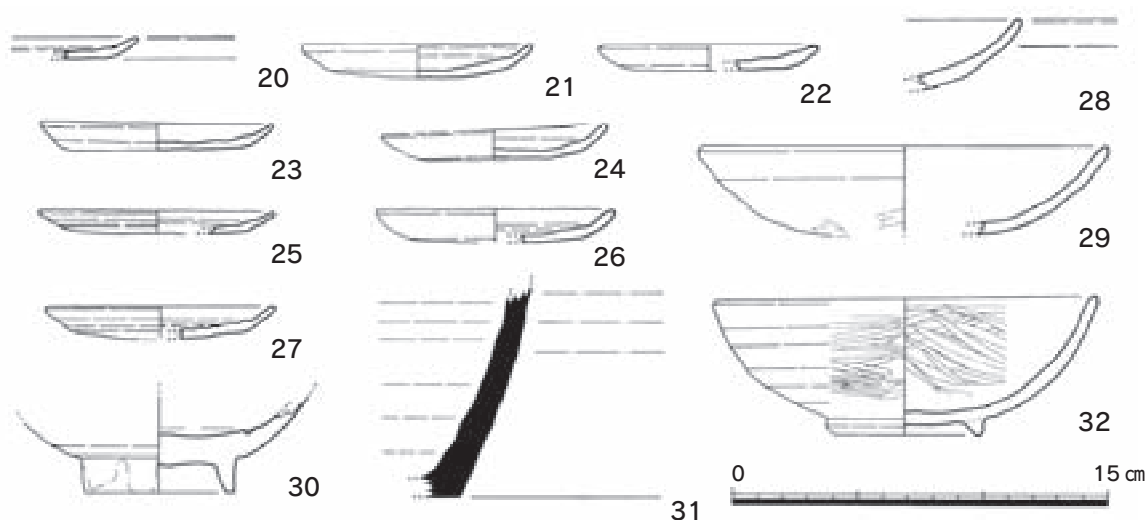


Fig.15 SD2 出土遺物実測図 (S1/3)



Fig.15-23



Fig.15-21



Fig.15-28



Fig.15-25



Fig.15-24



Fig.15-29



Fig.15-27



Fig.15-30



Fig.15-31



Fig.15-32

PL.7 出土遺物

SD21 SD5の西側SD3に切られる。検出長2.4m、幅50cmを測り、細長い形状をなす。深さは20cmで断面は逆台形の形状をなす。主軸はN-10°-Wにとり、ほぼSD5に並行する。遺物の出土はないが、SD5と同一時期とも考えられる。

SD22 調査区の西南、SK11に切られ、SX2の北に位置する。検出長2.1m、幅20cmの細長い土坑状の形状をなす。深さ20cmで、断面形状逆台形をなし、主軸はN-2°-Wにとる南北溝である。

SD23 調査区の東、SX5の南に位置し、SD24を切る。検出長4.5mで緩い曲線を描く、細長い土坑状の形状をなす。幅は50~70cm、深さは10~15cm、断面形が逆台形状で、両端の終息部分は丸く収まる。主軸W-25°-Sにとる、SD1と対のものかとも考えたが南側に軸が振れている事、規模などが合致しないので別の遺構とした。

SD24 SD23に切られ、未調査区へと続く。検出長1.2mの土坑状の形状をなす。幅は85cm、深さは25cm前後で断面形状は逆台形をなす。土坑とも思われるが確認できない。主軸は、W-20°-Sとなる。

SD25 調査区の西、SX1の北側に位置し、未調査区へと続く。検出長1.4mで幅50cmの細長い土坑状の形状をなす。主軸N-7°-WでSD16と軸が、ほぼ同一となる。SX1により分断されているが、不連続な溝の可能性ものこる。深さは16cm前後で断面形状は逆台形をなす。

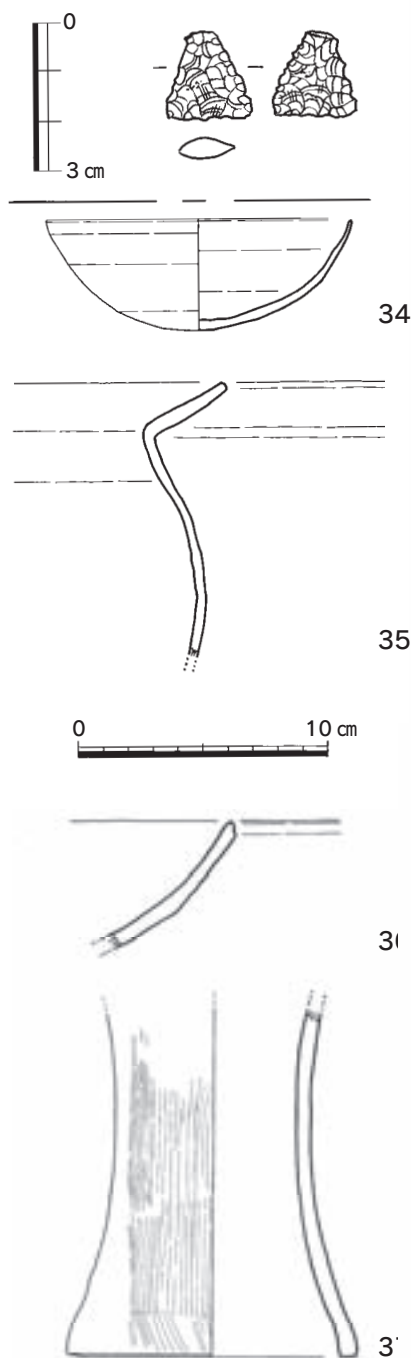


Fig.16 SD出土遺物実測図
(S 2/3・1/3)



Fig.17-33



Fig.16-34



Fig.16-35



Fig.16-36



Fig.16-37

PL.8 出土遺物

SD26 調査区の南、SD3とPitに切られ、SD27を切る。検出長1.6m、幅65cmで細長い土坑状の形状をなす。掘り下げてないため深さ断面形状ともには不明。溝の主軸は、W-15°-Sにとる。

SD27 SD1とSD3・SD26に切られる。総検出長5.8mで、溝は幅10cmの狭い溝で繋がる。東側は、長軸3.3m、短軸50～80cmのナイフ状のプランをなす。深さ・断面形状は未掘のため不明。西側はSD26に重複しているため形状・断面形状は不明。主軸はW-15°-Sにとる。

SD23・24・25・26は一連の不連続な溝としておきたいが、SD26・27が未掘である事、遺物取り上げ略図ではともにSD1・3を切って所在する。遺物取り上げ略図を生かすならば、SD1やSD3より新しい溝状遺構になりこれら不連続な溝はSD1やSD3より新しいものとなる。

SD28 主軸は、SD5にほぼ一致。検出長1.8m、幅20～35cmの細長い土坑状をなす。深さは10～15cmで断面形状は逆台形となる。

SD30 SD14の南側に所在する。主軸をN-18°-Wにとり、検出長5.6m、幅30～50cmのスプーン状のプランをなす。断面は、深さ25cmの逆台形の形状をなす。



PL.9 SX1

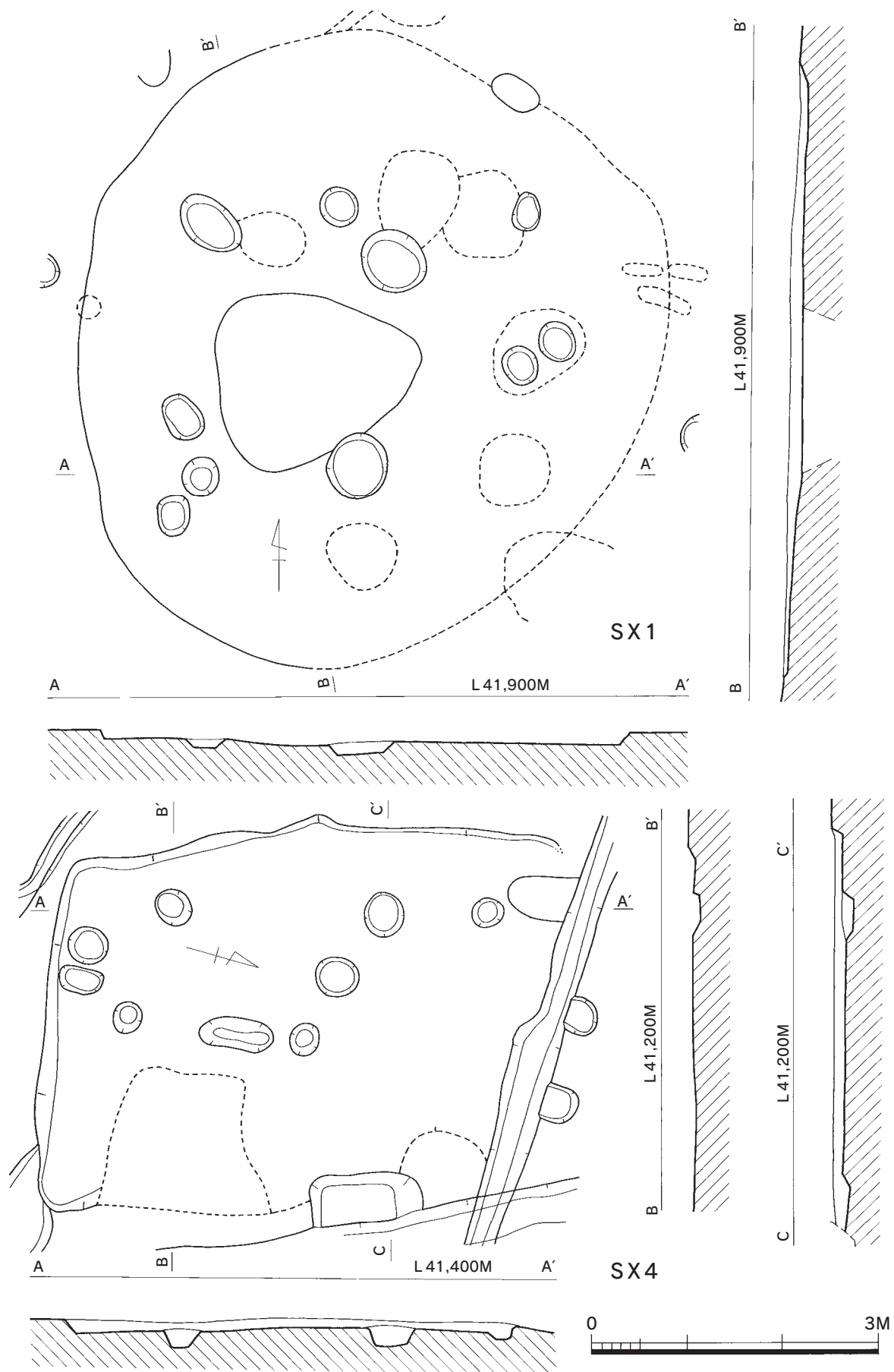


Fig.17 S X実測図 (S1/60)

SD31 調査区北西のSD4・5の間にある。北西からSD5の方向へ15.7m直進し、ここから東に「L」字状に曲がり、SD4まで3.2m延びるが、その先は全体的に掘り下げられて続きは確認できない。仮SD4・5間を道路状遺構とすると、SD31の周辺は道路基盤の地業による土の汚れや堆積層で複雑なため、把握できなかった結果の掘り下げ、またSK5の南側も同様な結果で不自然な掘り込みが多くなり、遺構がかなり失われた可能性があったり、遺構の続きが検出できていないものと思われる。遺構配置図にも溝の掲載はなかったため確認できるものは復原し図化した。復原した溝は幅50～80cm、深さ30cmを測り、断面形状は逆台形なす。出土遺物は不明。

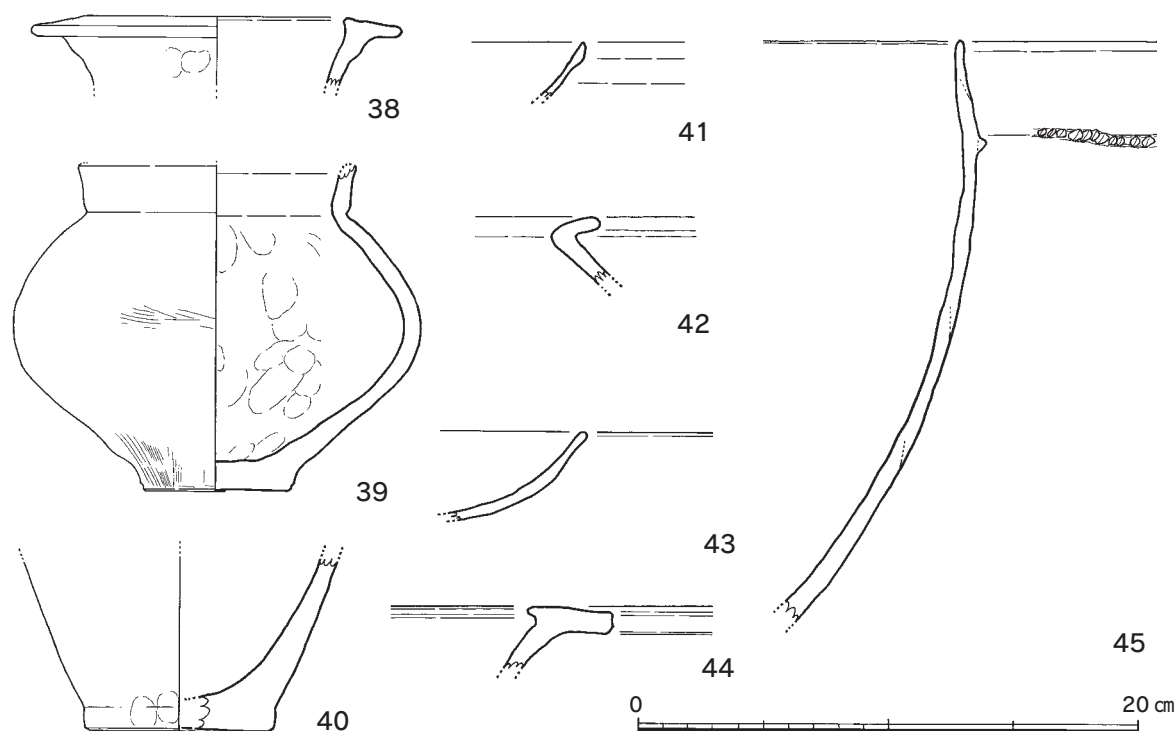


Fig.Pit出土遺物実測図 (S 1/3)



Fig.18-38



Fig.18-42



Fig.18-43



Fig.18-45



Fig.18-39



Fig.18-40



Fig.18-44

⑥ S X（性格不明遺構）（Fig.17）

遺構図面と遺構番号の精査の結果、住居跡の可能性があると判断したが、S Xとして表記し、平面プランは復原した。プランの一部は検出し掘削している。このため復原図は掘削していないプランを破線とし掘り下げた部分のみを実線で掲載した。5軒の他にもSB1・SK1東側付近にもGの番号が付されているが、地山全体が下げられていて追認できなかったが、住居跡の可能性が強い。

S X 1 調査区南西に所在、北側～南側の壁のみ検出している。床面は平坦と考えられ、写真でも確認できる汚れが目立っていた。径6.3～6.57mの楕円形の形状をなす。柱穴は5本と考えられる。住居跡中央にあるSK16は住居内の中央土坑の可能性もあるが追認できなかった。出土遺物には、弥生時代のものと思われる碎片が多くあったが図示できるものはない。

S X 2 S X 1の東側に位置。径はS X 1とほぼ同一規模で、楕円形の形状をなすと思われる。柱穴は未掘のため明確にできない。出土遺物には、弥生時代のものと思われる碎片が多くあったが図示できるものはない。

S X 3 調査区の最南端、S X 2の南側に位置。長軸4.8m、短軸3.2mの寸づまりの長方形の形状をなす。柱穴は未掘のため明確にできない。出土遺物には、弥生時代のものと思われる碎片が多くあったが図示できるものはない。

S X 4 調査区のほぼ中央部、S D 3・5に切られる。長軸5m、短軸3.6mの隅丸長方形の形状をなす。南・西壁は検出しているが、北壁はSD3と重複するため未掘。南東コーナー付近にかまど状のものが確認できるが未掘のため詳細は不明。柱穴についても完掘していないため詳細は不明。出土遺物は碎片が多く図示できるものはない。

S X 5 調査区中央東端に位置。東壁・南壁のラインだけが追認できた。未掘のため詳細は不明。出土遺物は弥生時代の碎片が多くあったが図示できるものはない。

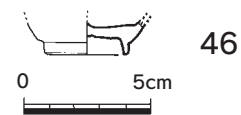


Fig.19 TL出土遺物実測図 (S1/3)



PL.11 出土遺物

⑦ Pit

Pitは、調査区全域に検出、特にS Xの周辺部に集中して検出されている。

出土遺物（Fig.19-38～45、PL.11）

38は壺の口縁付近の破片。復元口径14.8cm、現存高2.7cmで、外面灰白色10YR8/2、内面浅黄橙色10YR8/3の色調を呈し、砂粒を多く含むが焼成は良い。

39残存高13.05cm、胴部最大径16.8cm、復元底径5.9cmを測る壺片。色調は内外ともに、にぶい黄橙色10YR6/3～6/4をなし、焼成は良い。**38・39**ともにPit1から出土。**40**は甕の底部片。残存高6.95cm、復元底径7.5cmを測り、胎土には多くの砂粒を含むが焼成は良い、摩滅が著しく調整は不明でPit101から出土した。**41**は白磁碗の口縁部片。口縁端部は僅かに玉縁になる。**42**は無頸壺の口縁片で僅かに丹がのこる。Pit66から出土した。**43**、坏aの破片で器表は摩滅が著しい。**41・43**

はともにPit33から出土。**44**は壺の口縁部片。器表は摩滅し調整は不明。Pit44から出土。**45**はPit104から出土の残存高23cmの弥生早・I期の甕。口縁部が直立する単口縁をもち、口縁直下の器体にキザミ目のある突帯を一条貼り付けている。底部は失われているが、底部に向かってすぼまる砲弾型をなすと思われる。器表は摩滅しているが焼成は良い。**38～40・42・44**はいずれも弥生中期中葉の所産である。

⑧トレンチ1出土遺物 (Fig.20—46、PL.12)

確認調査で出土した白磁の合子片。残存高1.4cm、復元高台径3.35cmを測る。素地は乳白色で精良、高台下端のみ釉を掻きとり、他は全面に施釉がされている。SD2の上面から出土した。

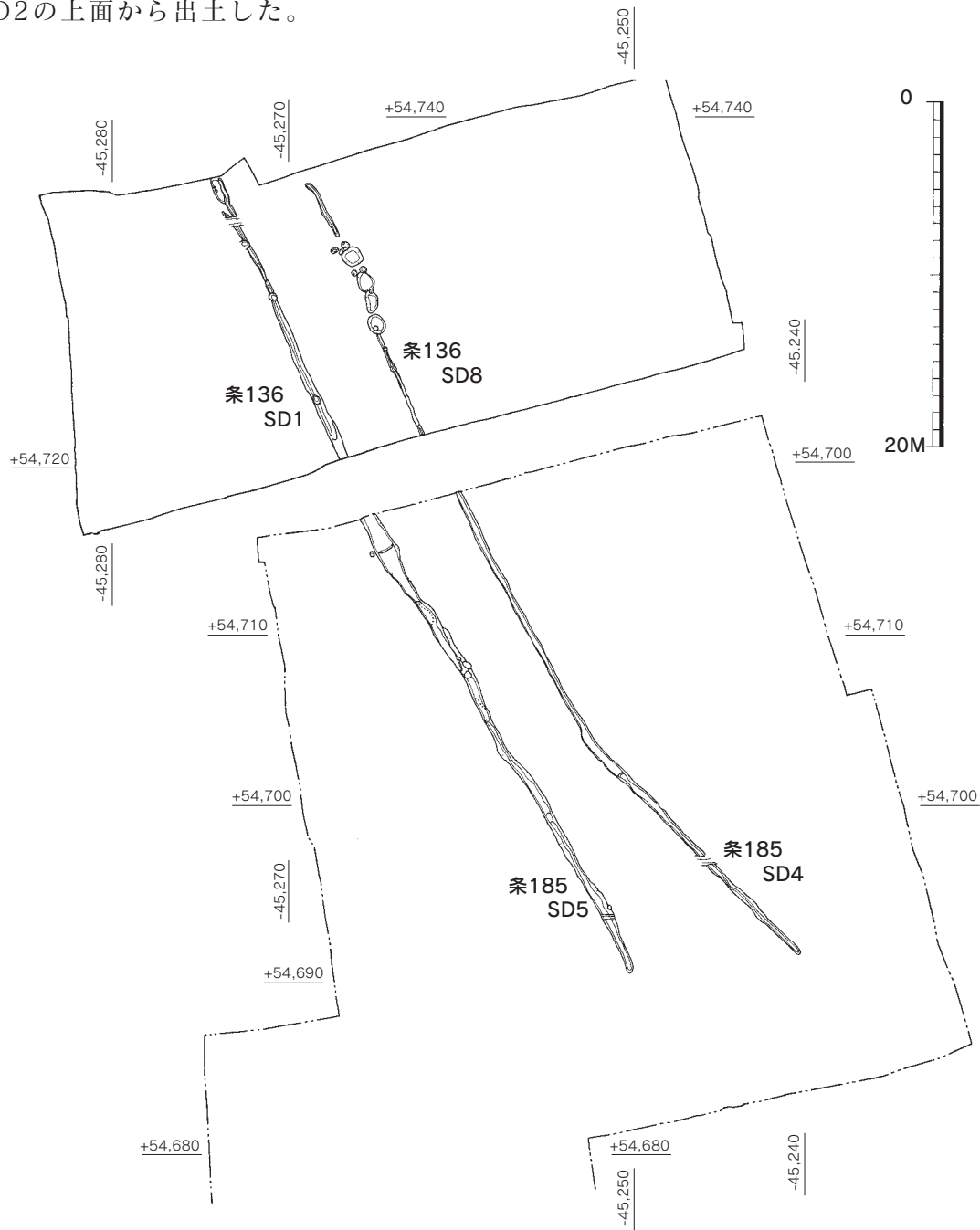


Fig.20 条坊136次との遺構関連図 (S1/400)

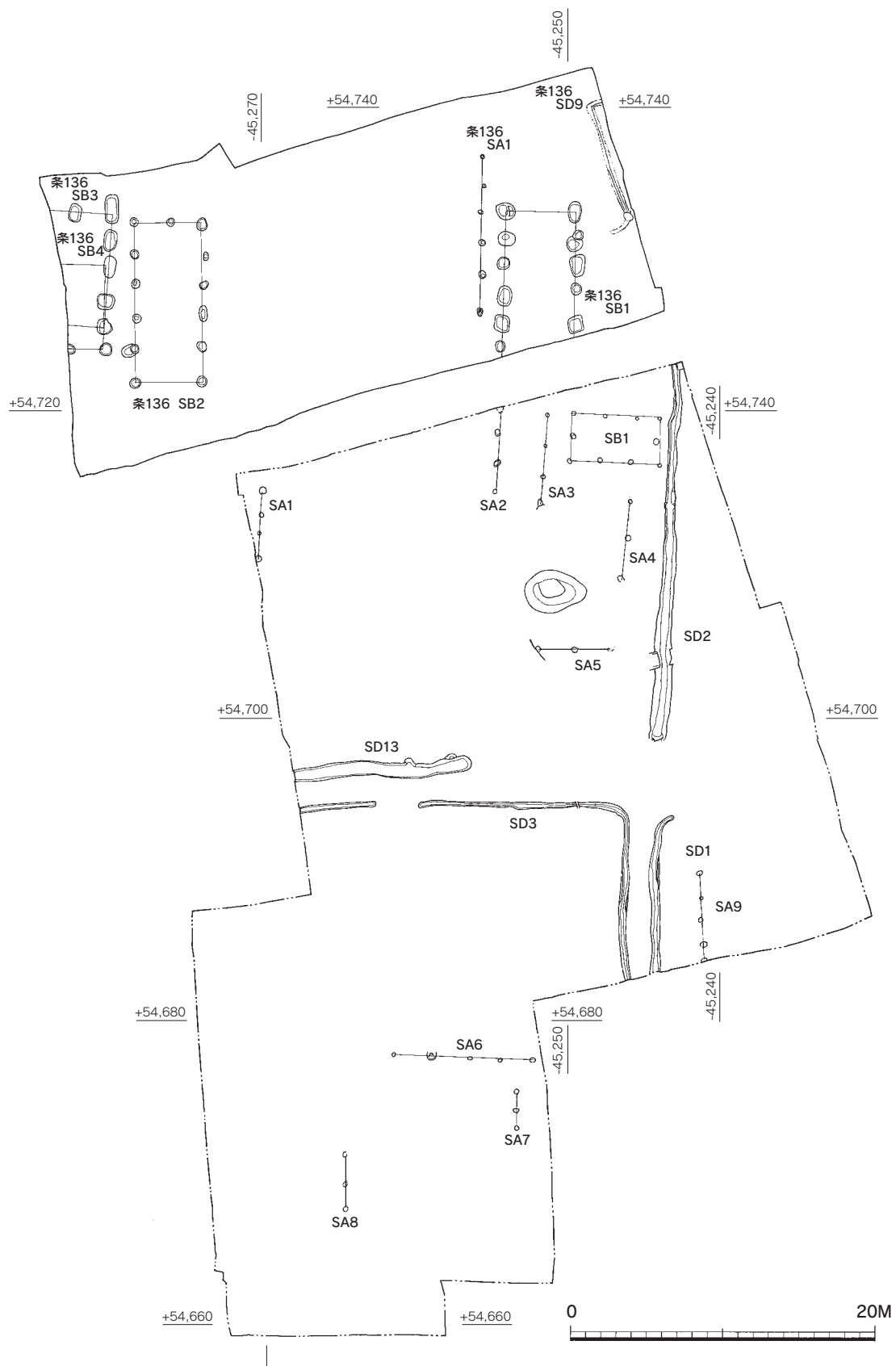


Fig.21 条坊第136次・185次調査区画溝位置図 (S 1/400)

4. まとめ

今回の調査は、追加作業により遺構図の復原を行ったが、完掘した遺構は精査ないままで、幸いにも土層図のあるものについては、可能性を本文中で述べた。しかし遺跡や遺構の性格付けには留意する必要がある問題をはねのこした。ここでは北側で調査した条坊跡第136次調査の成果との関連を踏まえ、まとめとしたい。

SD4・5の遺構について 条坊第136次調査について、条136SD1では断面は「U」字状の溝で幅20～30cm、深さ25cmを測り、今回の調査で検出されたSD5と連続するものと考えられる。また条136SD8は、幅10cm前後、深さ10cmの浅い逆台形の断面形状をなし、埋土は単一層の報告をした。これに繋がると考えられるSD4は、逆台形状の断面で、幅が若干広がるものの溝内の埋土は単一層で共通の状況を示し、やはり同一の溝である可能性が考えられる。これらがそれぞれ同一の溝とするとFig.20に示されるようにSD4は条136SD8にSD5は条136SD1へと延び、条坊第136次調査で検出されたものを含めると検出長は55mとなる。この遺構の主軸はN-30°-Wと大きく西に傾き、東西・南北に合致する条坊の溝とは違いを見せ、出土する遺物も弥生時代の遺物のみが出土している。また条136SD1の溝は調査前の畦畔にほぼ沿うように所在した事も考慮すると旧地割が畦畔としてのこった可能性も考えられる。

また本文の中でSD4・5の両間は道路跡の可能性のある事を述べたが、あくまで現状の写真・図面上からの推測であり、周辺からこれらに続く遺構が検出された時に結論を委ねる事とする。

SB1について、条136SB1と建物筋がほぼ一致する事は本文中で述べたが、ここでは条坊136次で検出された建物跡との関係を考えてみたい。条136SB1の柱穴掘り方は隅丸長方形や隅丸方形の掘り方形状をなし、これらは隅丸長方形や隅丸方形の柱穴の間に楕円形の柱穴を配置し、また掘り方の中に足場杭までが残る形態をとる。

条185次調査で検出された柱穴掘り方は、楕円形や不整円形の形状を呈し、深さも10cm前後と遺存状況も悪い。条136次調査のSB1とSB2については、建物筋は、ほぼ南北方向となるが、掘り方埋土・形状・規模の違いもあり時期差がある事は既に報告した。今回検出された条185SB1は、条136SB1とは、やはり柱穴規模・形状の違いがあり同時期とは考えにくく、ここでは条185SB1は条136SB2と関連のある建物跡として捉えておきたい。

区画溝について、今回の調査地点は推定条坊域のやや南に位置し、調査区内には規模を同じに企画されたSD1・2・3の区画溝が存在した事になる。また条136次の調査区内にも同様な規模のSD9が検出されている事から、この周辺の居住地の在り方の一端を示すものとして興味をもたれるが、データが増えた時点まで結論は委ねたい。

報告書抄録

ふりがな		だざいふじょうぼうあと						
書名		大宰府条坊跡						
副書名		第185次調査						
巻次								
シリーズ名		筑紫野市文化財調査報告書						
シリーズ番号		第94集						
編集者名		渡邊和子						
編集機関		筑紫野市教育委員会（教育部・文化財課 文化財担当）						
所在地		〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1-1-1 TEL.092-923-1111(代)						
発行年月日		西暦2009年 3月 27日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡	ちくしのし 筑紫野市 とうのはるひがし 塔原東	402176	170310	33° 00′ 01″	129° 30′ 01″	1993.1.16 ～ 1994.3.01	1,780m ²	共同住宅 建築
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
大宰府条坊跡	集落址	弥生時代 平安時代		柵 掘立柱建物跡 溝状遺構 土坑		弥生土器 白磁 土師器 須恵器		

大宰府条坊跡

筑紫野市文化財調査報告書

第 94 集

平成21年3月27日

発 行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会
〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1-1-1
TEL 092-923-1111(代)
FAX 092-923-9644

印 刷 信 光 社 印 刷 (有)
福岡県朝倉市一本32-1